

学生は高校で何を学んでくるか —普通科高校教育課程の分析—

—大学入試センター 荒牧 草平, 山村 滋—

1. 生徒の多様化とその対応

進学率が上昇するにつれて、高校に入学してくる生徒の能力・興味・進路の多様性は増大してきた。こうした状況に対応するため、高校教育の改革が多方面で進められている。それらのうち教育課程に与える影響の強さという点でとくに重要なのは、学習指導要領の改訂である。

すなわち、①卒業に必要な修得単位数が減らされるとともに、②(とくに主要教科の)必修単位数が少なくされ、生徒による自由な科目選択が奨励されているのである。表1にも示したように現行の学習指導要領(1994年から実施)では、教科・科目の総単位数が90単位の標準的な授業構成¹⁾の場合、少なくとも制度的には、必修の38単位をのぞく52単位が自由に決められることになっている。こうした傾向は前回の改訂からみられるが、近年における大学入試の変化が、教育課程の多様化を助長していると考えられる。

しかし、今日と同様「大幅な科目選択制」を特徴としていた新制高校発足当初の教育課程は、結局のところ「卒業後の進路」に応じたコース・類型制の導入と「学校必修」に落ち着いた(飯田1996)。このことを参考にすれば、現行教育課程においても「自由な科目選択」がその理念通りに実現しているとは考えにくい。総合選択制高校や総合学科の事例報告もそうしたことを予測させる(佐藤他1995; 岡部1997; 小川1997; 田中1999)。

実際の教育課程で、ゆとりの教育や自由な科目選択がどの程度実現しているかを知ることとは、高校教育の在り方や大学教育との接続を考える上で非常に重要である。本報告では

全国的なサンプリング調査をもとに、今日の普通科高校における教育課程の基本的な特徴を明らかにし、大学教育との接続という点から考察を加える。

具体的な分析課題は以下の3点である。

- ①卒業までに履修する総単位数。
- ②生徒による科目選択の設定状況：選択単位数。選択可能な科目。
- ③コース・類型(以下、類型と呼ぶ)の設置状況：類型数。分化の時期。内容。

ここで類型と呼んでいるのは、文系、理系、体育コース、進学コースのように、一定の教育目的に合わせて編成された教育課程のことである。多くの場合、類型ごとにクラス分けがなされている。

図1 教育課程の規定構造

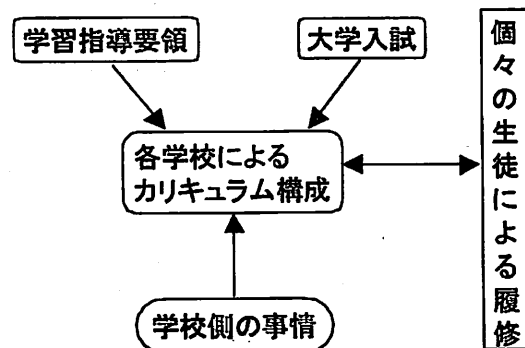


表1 戦後における高校学習指導要領の改訂

施行年度	卒業に必要な単位数	必修単位数	
		全教科	主要教科
50年代前半	85	38	29
56年～	85	45	30
63年～	85	68	43
73年～	85	47	31
82年～	80	32	16
94年～	80	38	20
2003年～	74	31	14

2. 調査(教育課程表収集)の概要

- ・対象：全国の高等学校から 10%抽出した 537 校。
- ・時期：平成 9 年(1997 年)5 月に当該年度の教育課程表の送付を依頼。7 月迄に回収。
- ・回収：466 校から回収(回収率 86.8%)。今回の報告では、全日制普通科(併設校を含む)349 校のうち利用可能であった 331 校のデータを使用する。

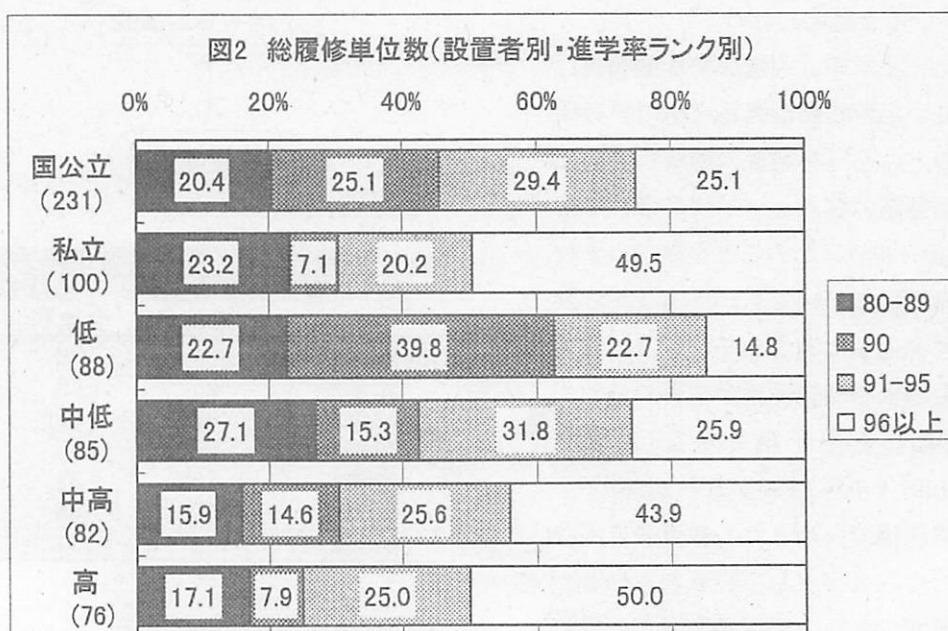
3. 分析結果

3-1 卒業までに履修する総単位数

文部省による公立高校を対象とした調査(1994 年実施)によれば、卒業に必要な修得単位数は、旧課程から現行課程への移行に伴って、「80~90 単位」は 33.4%から 58.9%へ、「91~95 単位」は 17.2%から 19.6%へ、「96 単位以上」は 49.4%から 21.5%へと変化し、修得単位数の少ない学校が増えている。しかし、卒業に必要な修得単位数と履修単位数に差を設ける学校の多いことが知られている。たとえ修得単位数に達していても一部未修得のまま卒業を容認することは少ないため、

履修単位数が実質上の「卒業に必要な単位数」であるとみなせる。図 2 にわれわれの調査データから集計した総履修単位数の分布を示した。国公立高校をみると²⁾、総履修単位数は文部省の修得単位数調査が示すほど少ないわけではない。また文部省調査では「80-90 単位」というまとめ方をしているが、標準的な 90 単位を設定している学校が多いのであり、それに満たない学校は 2 割に過ぎない。隔週での学校 5 日制が実施されていることを考慮すれば、旧課程とくらべ 6 単位減少してもおかしくないと言えるが、現行課程の総履修単位数(以下、総単位数)はそれほど減っていない。むしろ、そうした状況の変化にも関わらずあまり変わっていないという印象が強い。

さらに文部省調査では対象にしていなかった私立高校では総単位数の多い学校が多く、96 単位以上が約半数にのぼる(最大 135 単位)。また進学率ランク別の分析では、進学率が高いほど総単位数が多いという明確な関連がみられ、進学率「低」校では 90 単位以下が 6 割を越え、進学率「高」校では 96 単位以上が半数に達する。



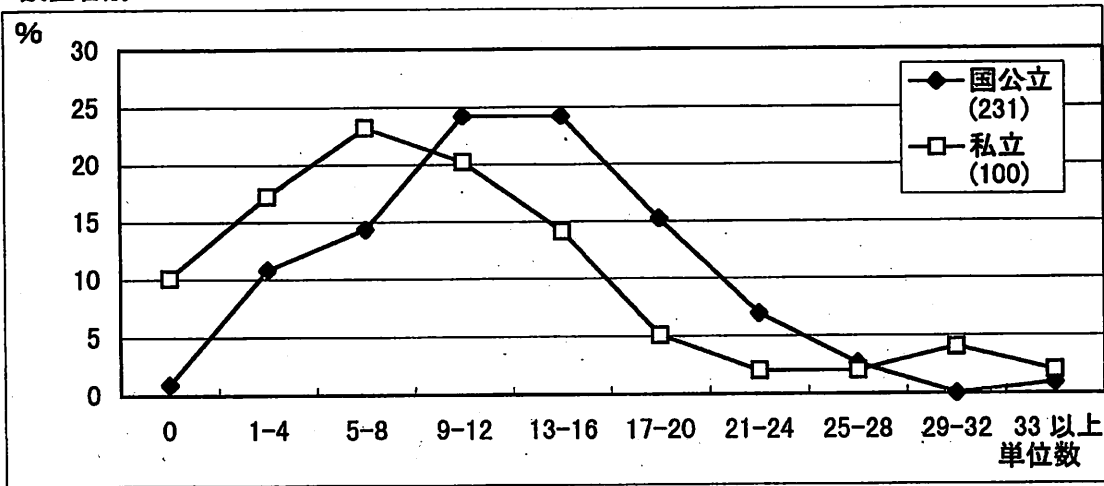
3-2 生徒による科目選択の設定状況

生徒にとって選択可能な単位数の分布は図3a(設置者別)とb(進学率ランク別)に示した通りである。図3aより、公立では16単位以下(平均12.5)、私立では12単位以下(平均9.8)の学校が全体の4分の3を占める³⁾。総単位90単位の場合、本来なら50単位以上が自由に決められることを前提にすれば、生徒に残された選択の余地はかなり少ないと言える。結局、過去における「大幅な科目選択制」と同様、制度上は必修にされていない科目の大部分は学校必修によって決められているのである。また図3bより、進学率ランクが高いほど選択できる単位数の数は多くなって

いる。

次に、実際に選択できる科目について、文系類型と理系類型を取り上げ、進学率「低」グループと進学率「高」グループ別に調べた結果が表2である。ここから、いくつか重要な特徴が指摘できる。①文・理とも低進学率校では全般的に選択の余地が少ない。とくに文系でその傾向が顕著である。②文・理とも高進学率校では低進学率校より選択の余地が大きい。しかし多くの学校で選択可能にしている科目は理科と地歴に集中している。③国語・数学・英語を選択可能にしている学校は少なく、開設されていないか、必修で課されているかのどちらかである。④それぞれの科目を開設するかしらないかは、各学校の進学率

図3 選択単位数
a 設置者別



b 進学率ランク別

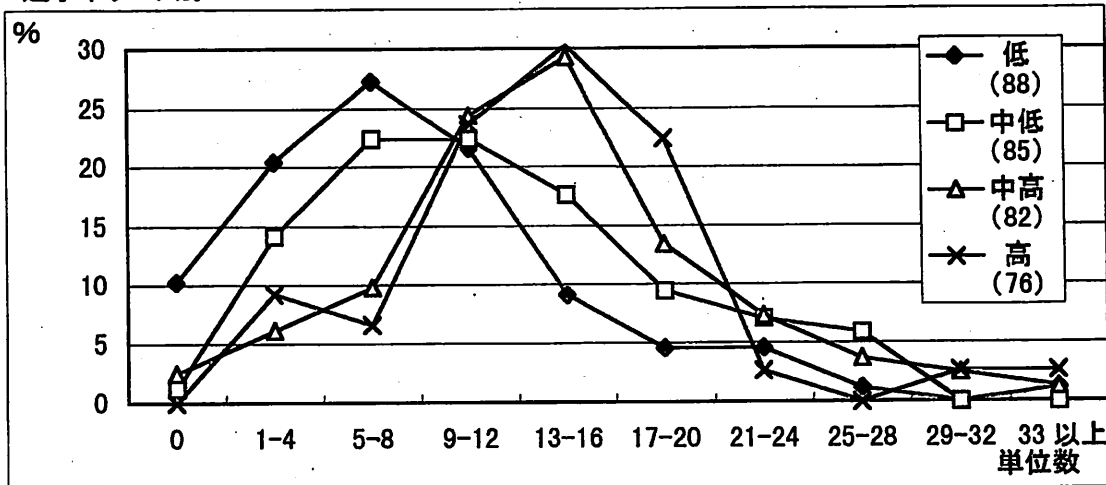


表2 文理別・進学率別 各科目の開設状況(%)

科目名	文 系						理 系					
	必修		選択可能		非開設		必修		選択可能		非開設	
	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高
国語Ⅰ	100	97	0	0	0	3	100	97	0	0	0	3
国語Ⅱ	91	30	0	0	9	70	94	38	0	0	6	62
国語表現	26	8	11	20	63	73	9	8	9	3	82	89
現代文	100	98	0	0	0	2	85	83	0	2	15	15
現代語	3	2	9	2	89	97	3	2	3	2	94	97
古典Ⅰ	86	82	6	0	9	18	36	62	3	3	61	35
古典Ⅱ	29	83	3	0	69	17	6	41	0	5	94	55
古典講読	3	14	11	17	86	70	0	5	3	3	97	92
世界史A	29	35	0	15	71	50	45	47	0	17	55	36
世界史B	69	45	14	45	17	9	52	29	3	35	45	36
日本史A	20	8	3	33	77	59	36	9	9	35	55	56
日本史B	60	20	26	70	14	11	30	6	6	56	64	38
地理A	26	14	9	27	66	59	24	17	9	29	67	55
地理B	14	6	20	64	66	30	12	8	6	53	82	39
現代社会	49	33	0	0	51	67	48	32	0	0	52	68
倫理	49	64	3	14	49	23	48	64	0	11	52	26
政治経済	63	70	6	18	31	12	61	68	3	11	36	21
数学Ⅰ	100	97	0	0	0	3	100	95	0	0	0	5
数学Ⅱ	86	91	3	5	11	5	100	97	0	0	0	3
数学Ⅲ	3	8	3	6	94	86	76	80	3	9	21	11
数学A	69	91	11	2	20	8	76	92	9	0	15	8
数学B	29	70	9	15	63	15	79	92	12	3	9	5
数学C	0	5	0	11	100	85	48	74	0	12	52	14
総合理科	6	9	0	2	94	89	3	9	0	0	97	91
物理IA	11	12	0	8	89	80	21	9	0	5	79	86
物理IB	9	8	17	29	74	64	36	30	36	65	27	5
物理Ⅱ	0	2	6	14	94	85	0	11	33	77	67	12
化学IA	23	23	0	5	77	73	15	20	0	3	85	77
化学IB	66	55	11	30	23	15	79	79	18	18	3	3
化学Ⅱ	6	2	20	27	74	71	24	56	33	32	42	12
生物IA	9	17	3	6	89	77	9	12	0	3	91	85
生物IB	63	36	17	50	20	14	70	27	24	62	6	11
生物Ⅱ	3	0	23	29	74	71	9	0	42	76	48	24
地学IA	17	3	0	6	83	91	24	2	0	3	76	95
地学IB	6	2	11	30	83	68	0	0	6	20	94	80
地学Ⅱ	0	2	0	12	100	86	0	0	0	14	100	86
英語Ⅰ	100	95	0	0	0	5	100	97	0	0	0	3
英語Ⅱ	97	97	0	0	3	3	100	98	0	0	0	2
オーラルA	66	14	0	5	34	82	64	14	0	5	36	82
オーラルB	31	82	9	6	60	12	33	83	0	2	67	15
オーラルC	3	0	0	8	97	92	0	0	0	3	100	97
リーディング	97	94	0	0	3	6	94	95	0	0	6	5
ライティング	60	91	14	2	26	8	55	88	9	0	36	12
学校数	35	66	35	66	35	66	33	66	33	66	33	66

と密接に関連している。例えば文系の場合、進学率の高い学校では、ライティングは9割、古典Ⅱは8割、数学Bは7割の学校で必修だが、進学率の低い学校では、ライティングは4分の1、古典Ⅱと数学Bでは6割以上の学

校で非開設である。

比較的選択の余地が残されている進学率の高い学校では、こういった形で科目選択を実施しているか、平均的な学校の事例を取り上げ文系と理系に分けて調べてみた(資料1)。

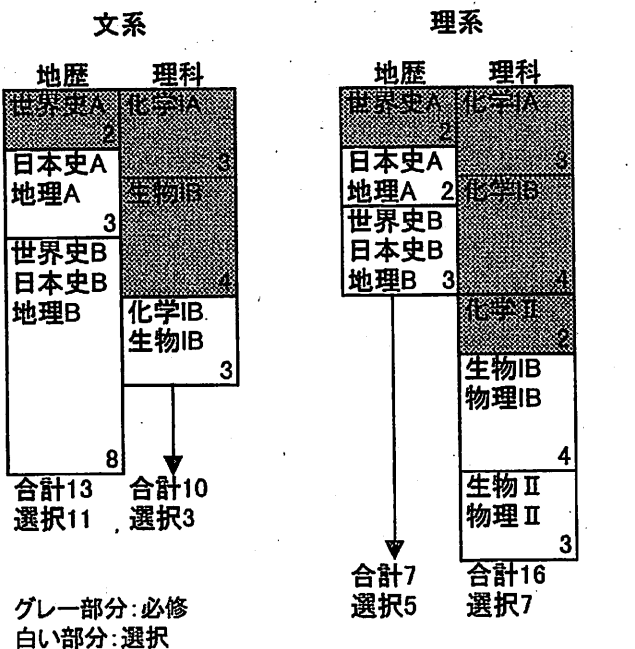
ここで平均的とは総単位数(96単位)文系選択単位数(14単位)理系選択単位数(12単位)がともに高進学率校の平均的値を示すという意味である。学習指導要領の規定では、地歴は世界史を含む2科目、理科はいずれか2科目を必ず履修することになっているが、この学校では、それぞれ2科目しか履修しなくてよい、あるいはできない状況になっている。結局、選択単位数が比較的多いこれらの学校で

も、実際にできる選択の大部分は、理科と地歴をどの科目に絞って重点的に学習するかであるに過ぎない。

3-3 類型の設置状況

上でみたように、多くの学校では生徒による科目選択の余地が限られている。そのひとつの要因として、複数の類型に分けていることがあげられる。生徒に自由な科目を選択さ

資料1 高進学率校の平均的な科目選択状況の事例



文系の教科別単位数

教科	単位数 (選択)
国語	20 (0)
地歴	13 (11)
公民	4 (0)
数学	10 (0)
理科	10 (3)
英語	21 (0)
6教科計	78 (14)
保健体育	11 (0)
芸術	3 (0)
家庭	4 (0)
総単位	96 (14)

理系の教科別単位数

教科	単位数 (選択)
国語	15 (0)
地歴	7 (5)
公民	4 (0)
数学	18 (0)
理科	16 (7)
英語	18 (0)
6教科計	78 (12)
保健体育	11 (0)
芸術	3 (0)
家庭	4 (0)
総単位	96 (14)

学習指導要領の規定

各科目の標準単位数

国語 I	4	総合理科	4
国語 II	4	物理 IA	2
国語表現	2	物理 IB	4
現代文	4	物理 II	2
現代語	2	化学 IA	2
古典 I	3	化学 IB	4
古典 II	3	化学 II	2
古典購読	2	生物 IA	2
世界史 A	2	生物 IB	4
世界史 B	4	生物 II	2
日本史 A	2	地学 IA	2
日本史 B	4	地学 IB	4
地理 A	2	地学 II	2
地理 B	4	英語 I	4
現代社会	4	英語 II	4
倫理	2	オーラル A	2
政治経済	2	オーラル B	2
数学 I	4	オーラル C	2
数学 II	3	リーディング	4
数学 III	3	ライティング	4
数学 A	2		
数学 B	2		
数学 C	2		

オーラル:オーラル・コミュニケーションの略

必修規定

- 国語:国語 I
- 地歴:[世界史A,B]から1科目 & [日本史A,B,地理A,B]から1科目
- 公民:[現代社会] [倫理・政治経済]から1科目
- 数学:数学 I
- 理科:[総合理科] [物理I,IB] [化学I,IB] [生物I,IB] [地学I,IB]から2科目

注:平均的とは、文系の選択単位数(14単位)、理系の選択単位数(12単位)、総単位数(96単位)がいずれも、高進学率ランク校の平均的値であることを指す。

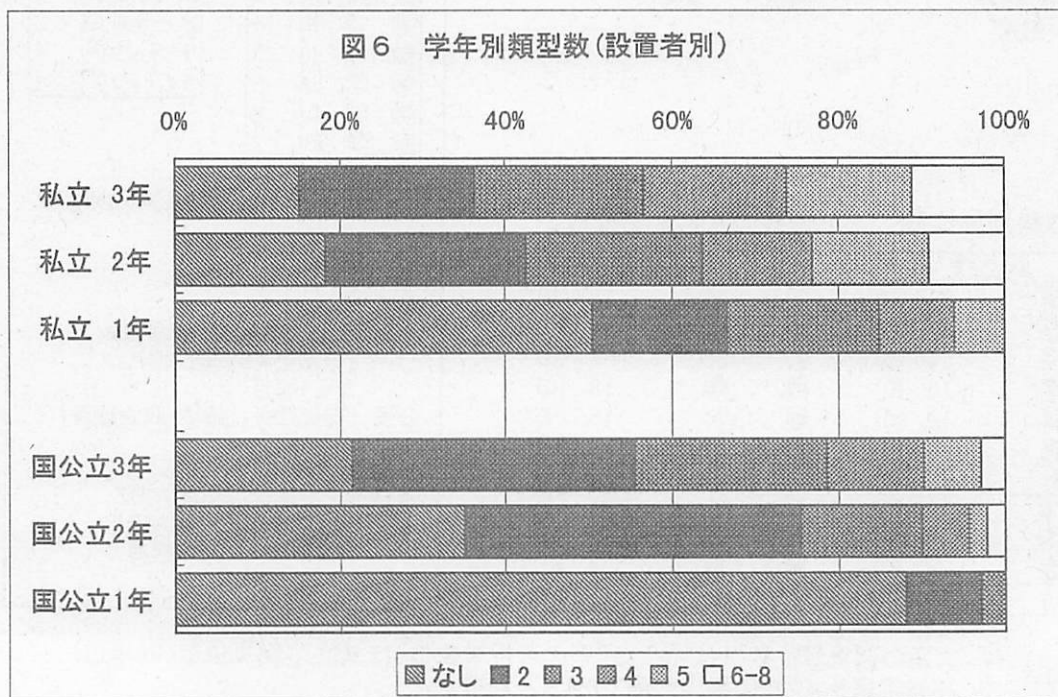
せる代わりに、学校が用意した科目セット(=類型)を選ばせているのである。図6に各学校が設置している類型数を、設置者別・学年別に示した。最終的な類型数(3年次類型数)をみると、公立では3類型以下、私立でも4類型以下の学校が8割弱を占めている。類型を細分化することで生徒の多様性に対応しようとする学校は多数派でないことがわかる。多くの学校では、2類型の場合は「文系/理系」(68%)あるいは「進学/就職」(18%)から、3類型の場合は「文系/理系(どちらかを2つに分ける)」(41%)「文系/理系/文理系」(27%)「文系/理系/就職」(18%)の組み合わせから選択できるに過ぎない。

一方、多くの類型に分けている学校もあるので、そこで具体的に設置されている類型の種類を調べると、ほぼ「特進文」「文」「特進理」「理」「文理」「英語」「体育」「芸術」「就職」の組み合わせに尽きる。「就職」類型を多数設置している学校はまれである。結局のところ類型は、【進学/非進学】【分野(文-理-他)】【進学先(難易度)】の組み合わせから設置されている場合が多く、類型数の多さ

はおもに進学類型の多さを意味している。ここからは進学率の高い学校ほど類型数が多いと予想されるが、実際には両者の間に相関は認められない。大学進学率の上昇によって、あるいは経営戦略的な理由から、かつては大学進学率の低かった学校でも、進学者向けの類型を用意するようになったことがその主たる原因と考えられる。

ここで図6にもどり、類型分化の時期に注目すると、公立の12%、私立の51%が1年次から分化させている。このこと自体重要な意味を持つが、いっそう興味深いのは、特に私立の場合、1年次から類型に分ける学校は、分けない学校よりも進学率が低いことである。1年次は類型に分けない私立学校の大学・短大進学率が平均76%であるのに対し、分ける学校が59%、4大進学率では47%に対し31%である(図表略)。進学率の低い高校の一部は、相対的に学力の高い生徒を1年のうちから囲い込むことによって、「進学実績」をあげようとしているのだと考えられる。

最後に、選択単位数の重回帰分析から、これまでの変数間の関連をみってみる。説明変数として投入したのは、生徒数(98年の卒業生

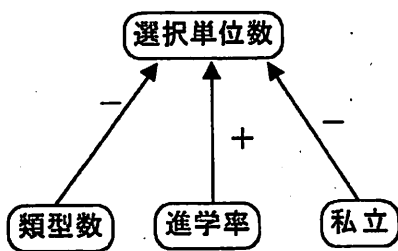


数), 進学率(大学短大進学率, 4年制大学進学率), 設置者(私立ダミー), 類型数, であり, 手順はステップワイズ法によった⁴⁾。表2に示した通り, 選択単位数が多いのは, 進学率の高い, 類型数の少ない, 国公立の学校であるとわかる。いわゆる進学校は, 受験科目に合わせて重点的に学習する理科や社会を選択するため, 選択単位数が多いという姿が浮かんでくる。また, 類型数が選択単位数に対して負の効果を持っていることから, 両者はトレードオフの関係にあることがわかる。多数の類型を用意し, さらに多くの科目を選択可能にすることで生徒の多様性へ対応するのでなく, 類型と科目選択のいずれかを少し多めに用意することで対応しているのである。

表2 選択単位数の重回帰分析

	選択単位数
大学・短大進学率	.353**
類型数	-.291**
私立ダミー	-.141**
R2	.222
調整済みR2	.215
F値	30.8

上段はベータ係数の値。 ** p < .01



4. 考察

近年における高校教育改革のキーワードは, 個性化・多様化・弾力化そして「ゆとりの教育」である。生徒の個性と多様性に合わせた教育を実施できるよう制度を多様化・弾力化し, 「ゆとり」をもって学習できるようにするというわけである。冒頭で述べたように, 学習指導要領の改訂も, 総単位数と必修単位数を減らし, コース・類型制や学校独自の科目設定を承認し, 生徒による自由な科目選択

を奨励する方向で進められてきた。

しかし, 現行教育課程においても学習量そのものが大きく減少したわけではなかった。特徴的なのは, 特定の教科・科目にしぼった学習を可能にしている(あるいは強制している)点である。これを生徒一人ひとりの興味・関心や個性に合わせたゆとりの学習を提供していると解釈すれば, ひとつの理想状態と評価できるが, 類型であれ科目であれ, 生徒が実際に選択できる「多様性」は, ほぼ【進学/非進学】【分野(文/理/他)】【進学先(難易度)】【受験科目】の組み合わせに限定されている。端的に言えば, 自分(=受験)に必要な教科・科目を「捨て」て, 「効率的」に大学受験の準備をすることが可能となったのである。

18歳人口の急減という状況の中で進行している, 今日の大学入試の多様化は, 学生募集を強く意識した試験科目数の削減, 軽量化の側面が強いという(荒井 2000)。われわれの分析から明らかになった高校教育課程の特徴も, こうした現状に対応したものと考えられる。

高校教育が大学受験に規定されていること自体は, 以前から指摘されてきたことである。しかし, かつては少なくとも履修科目の幅が現在より広く, 受験シフトはそれを前提に行われていた。ところが現在は履修自体を受験科目に特化させることが制度的に許容(場合によっては強制)されているのである。結局, 多様化をめざす学習指導要領の改訂は, 軽量化した大学受験に合わせた, 偏った教育課程の編成を促進したことになる。

*本稿の内容に関するより詳しい分析は, 下記をご参照下さい。

荒牧草平・山村滋 2000「普通科高校における教育課程の『多様化』」荒井克弘編著『学生は高校で何を学んでくるか』大学入試センター研究開発部: 47-72.

注

- 1) 月曜日から金曜日まで6時間、土曜日が隔週で4時間の場合、3年間で96単位となる。ここから、ホームルーム(LHR)と必修クラブにあてられる6単位を引いた残りが90単位となる。
- 2) 国立高校が少ないため公立高校と合わせ国公立としてまとめた。
- 3) 芸術教科の中での選択(音楽・美術・工芸・書道のいずれを選択するか)は、ここでの選択単位数に含まれていない。
- 4) 生徒数は1998年卒業生数、進学率は、大学・短大進学率と4年制大学進学率を使用。資料：リクルート『高校総覧1998』

引用文献

- 荒井克弘 2000「高校教育と大学教育との接続」荒井克弘編著『学生は高校で何を学んでくるか』大学入試センター研究開発部：1-23.
- 飯田浩之 1996「高校教育における『選択の理念』」耳塚寛明・樋田大二郎編著『多様化と個性化の潮流をさぐる』学事出版：60-75.
- 小川洋 1997「総合選択制高校と高校教育の変動—普通高校の変容を中心に」菊池栄治編著『高校教育改革の総合的研究』多賀出版：3-24.
- 岡部善平 1997「『総合学科』高校生の科目選択過程に関する実証的研究—選択制カリキュラムの社会的アプローチ」『教育社会学研究』第61集：143-161.
- 佐藤全他 1995『高等学校における学科編成・履修システムの改善に関する総合的研究』国立教育研究所.
- 田中葉 1999「『総合選択制高校』科目選択制の変容過程に関する実証的研究—自由な科目選択の幻想」『教育社会学研究』第64集：143-163.